

モーツァルトの死因

モーツァルトの死因は 150 も挙げられており、主なものとして、「リウマチ熱からの心不全説」「ペスト説」「水銀中毒説」「腎臓病説」等々があるようですが、有力な 3 つの死因：「(1) 急性粟粒疹熱」「(2) リューマチ性炎症熱」「(3) 水銀中毒」につきまして、以下に述べます。

(1) 急性粟粒疹熱

モーツァルトの死因は、死亡証明書に「急性粟粒疹（ぞくりゅうしん）熱」との記載があることから、そのように言われていますが、「粟粒熱」というのは、“病名”ではなく、単に通常の高熱や発疹から来る感染症の “症状” を広く指す言葉ということになります。

ただ、この言葉と関連して、アムステルダム大学のリチャード・ジーガーズ氏を中心とする研究チームは、モーツァルトはウィーンで連鎖球菌性咽頭炎に感染し、1791 年 12 月に死亡したという論文を、2009 年 8 月 18 日に「Annals of Internal Medicine (米国学術誌・内科年報)」に論文として発表しています。連鎖球菌性咽頭炎は、主に A 群 β 溶連菌の感染（溶連菌感染症）により「急性上気道炎」が起こり、その後、2 週間前後の潜伏期間を経て、血尿・蛋白尿、尿量減少、むくみ（浮腫）、高血圧の症状を有する「急性糸球体腎炎」を起こしたことが考えられます。この「急性糸球体腎炎」は、子供がかかることが多いのですが、成人も、発症率は低いのですが、溶連菌感染症にかかったことが原因で「急性糸球体腎炎」を発症することもあります。多くは、回復することが多いのですが、急速に進行して腎不全になることもあるので、人工透析も出来ないモーツァルトの時代には、この「急性糸球体腎炎による急性腎不全」で亡くなった可能性はあると考えられます。

上記のアムステルダム大学の研究とは別に、「The pathobiography and death of wolfgang amadeus mozart/ From legend to reality」という論文が、1997 年 5 月に「Human Pathology (人体病理学)」という米国医学誌に発表されています。この論文では、モーツァルトの最終死因は、増殖性糸球体腎炎と糸球体硬化によって引き起こされた腎不全に関連した気管支肺炎を合併した脳出血であると示唆しています。

(2) リューマチ性炎症熱

「リューマチ性炎症熱」という医学用語はありません。これが「関節リウマチ」を指すということであれば、初期は左右対称に手足の指の関節が腫れ、朝方にこわばりを感じるようになり、経過とともに関節破壊が起こり、生活に大きく支障を来すこととなります。頸椎に炎症が波及すると、脊髄が圧迫されることによる症状（手足のまひや脱力）が起こり、緊急手術が必要となる場合もありますが、モーツァルトの時代にはそれは不可能です。さらに、関節だけではなく「間質性肺炎」を起こしてしまうと、呼吸機能が低下し、命を落とすことになりかねません。また血管炎の合併により、皮膚の潰瘍や末梢神経の障害、目の炎症など多彩な症状を呈することもあります。

(3) 水銀中毒

古代より、水銀は永遠の命や美容などで効果があると妄信され、秦の始皇帝は永遠の命を求めて、水銀入りの薬や食べ物を摂取していたことによって逆に命を落としたと言われていすし、他にも多数の権力者が水銀中毒で死亡したと言われています。

16 世紀には、ヨーロッパで大流行した梅毒の治療法として、蒸気の吸入や軟膏の塗抹など

による水銀療法が行われ、多くの水銀中毒が出ました。梅毒の水銀療法は中国や日本でも行われました。水銀は中枢神経・内分泌器・腎臓などの器官に障害をもたらし、口腔・歯茎・歯にも損傷を与えますし、脳にも障害が起こり、最終的には死に至ります。

モーツァルトが梅毒にかかって水銀治療を受けたかどうか、あるいは、誰かが「暗殺目的」で、モーツァルトの食事に水銀を入れ続けたかどうかは、私が、現時点で調べた範囲では判りません。

(2022年2月11日記)